

## 序

明治15（1882）年3月23日刊行の『時事新報』に、福澤諭吉がおこなった「経世の学亦講究すべし」という講演の筆記が掲載されている。明治14年の政変により、明治23年を期して国会を開設することを定めた「国会開設の勅諭」が発せられた直後であり、巷では自由民権運動を中心に、政治熱が高まっていた。

当時、慶應義塾の学則では、まず初学者は物理学などから習いはじめ、次の段階として、政治学や経済学の書を学んだという。このことについて世間から、20歳前後の若者が政治学に触れると、過激な思想に走って危険ではないか、と危惧する声もあがった。福澤諭吉はこの講演で、そうした見解に対して、猛烈な反論を展開している。

福澤によれば、「政治経済は有用の学」であり、政治経済を学ぶことで「真成の理」を知り、「是非判断の識」を獲得できる。福澤は問う。「流行の政談に奔走」する過激で無軌道な若者が生まれているのはなぜか。それは、彼らが政治学や経済学を深く学ばず、「真成の経世論」を知らないからである。

「書を読むこと、いよいよ深き者は、いよいよ沈黙するがごとし」。書物を深く読む人物は、決して軽率に行動を起こしたりせず、沈黙して熟慮する。そして時と場所を判断して、適切に発言し、それを実践に移すことができる。「時ありて言うときはその言もまた適切」である。（慶應義塾編『福澤諭吉全集』第8巻、岩波書店、1960年、52-56頁。適宜、漢字をひらがなに改めた。）

同じ講演で福澤は、次のようにも述べている。「社会は活世界にして、学校に教る者も活物なれば、学ぶ者もまた活物なり」。政治の世界は動いており、学校においても教える者と学ぶ者が互いにいきいきと討論するな

かで、善き社会の実現を目指して探究を深めていく。

こうして福澤は、慶應義塾における政治学教育を通じて、非合理的な情念の波に飲み込まれず、またフェイクニュースに踊らされることなく、「真成の理」を探索する、深い叡智に基づく熟議の精神を養うことを求めた。

この伝統は、現在の法学部政治学科における研究会や演習の授業に継承され、鮮やかに生き続けている。その証<sup>あかし</sup>ともいえる素晴らしい成果として、このたび11本の論文を収載した『政治学研究』69号が公刊されることを、心よりお慶び申し上げます。

2023年4月

法学部教授・政治学科学習指導  
大久保健晴